



Title	Wuthering Heightsのアメリカ性（?）
Author(s)	大井, 浩二
Citation	大阪外大英米研究. 1966, 5, p. 76-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98964
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Wuthering Heights のアメリカ性 (?)

大 井 浩 二

I

アカデミックな読者は、*Wuthering Heights* のアメリカ性などというジョッキングな題名に思わず眉をしかめるかも知れない。鬼面人を驚かすという言葉があるけれども、まさしくその実例がここにあるのだ、との非難も覚悟している。Emily Brontë の作品がいかに異常な世界であるにしても、そのなかにアメリカ性を読みとろうとするのは、どだい無暴な力わざというものであり、冗談が過ぎるのではないかと攻撃されるにちがいない。僕が疑問符をつけておいたのも、僕のいささかのうしろめたさの現われと言えるかも知れないのだ。

にもかかわらず、ここで僕が *Wuthering Heights* を持ち出したのは、この作品が明らかにイギリス小説としては異端であり、時としてアメリカ小説の伝統にくみ入れることの可能性が口にされているからに他ならない。結局のところ、僕の目的はアメリカ小説のアメリカ性を考えることにある。従って、Brontë の作品をアメリカ小説の立場から考え直すことによって、アメリカ小説の特性にメスを入れることができるかも知れないと考えているのだ。この小説に与えられている膨大な量の評論はひとまず棚上げにして、まったくの素手に近い形で読み直してみようという訳であるのだ。

今更ここで指摘するまでもなく、イギリス小説の伝統について語る人が、Jane Austen の名前を挙げることは全く当然のことに思われている。すくなくとも、彼女がイギリス小説の最も偉大な作家ではないにしても、最も典型的な作家であることに異議をさしはさむ余地は全然ないと言うことはできよう。F. R. Leavis ならずとも、Austen を George Eliot, Henry James, Joseph

Conrad などとともにイギリス小説の伝統の四本柱に数えあげることが、ほぼ
(1)
常識的な線ではないだろうか。

ところが、Emily Bronte の場合、いささか事情が異っている。彼女の唯一の最高傑作たる *Wuthering Heights* が文句なしに優れたイギリス「小説」であることを認める学者批評家は枚挙にいとまがないほどであるにしても、これを「イギリス」小説として高く評価する人はまず見つけることが不可能であるだろう。はっきり言って、英語で書かれた作品である点を別にすれば、Brontë の作品はイギリス小説の本流とは無縁の存在であるかのごとき印象を僕らに与えるのだ。F. R. Leavis 流に言えば、「この驚くべき作品」は「一種の突然変異 (sport)」として受け取ることを余儀なくされている現状であるのだ。
(2)

突然変異としての *Wuthering Heights* は僕らの興味をひかずには置かないが、これにまして面白いのは、この Leavis の発言につけ加えたアメリカ批評家 Richard Chase の短い評言ではあるまいか。この優れたアメリカ小説論の持主によれば、イギリス小説の伝統にてらして突然変異であるかも知れぬ *Wuthering Heights* も、実はアメリカ小説史のなかの一冊として考える場合、きわめて普通のアメリカ小説として読者の眼に映るのではないだろうか。かりにこの作品を「アメリカ小説とすれば、それは突然変異などではない。それはきわめて数多くのアメリカ小説と共通性をもっているものであり、そのなかには最高傑作もはいつている」
(3)
とさえ Chase は断言しているのだ。イギリスとアメリカという二つの小説の伝統にこだわるならば、*Wuthering Heights* はアメリカ小説の流れをくむ傑作であり、Leavis 流の考えで行けばアメリカ小説はすべて「突然変異」である、と語っていた Chase の言葉を僕はいま改

(1) F. R. Leavis, *The Great Tradition* (1955), p. 1.

(2) *Ibid.*, p. 27.

(3) Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (1957), p. 4.

めて思い出しているのだ。

とすれば、Chase 流の考え方に立つかぎりにおいて、*Wuthering Heights* のアメリカ性を論ずることは、最初に思われたほどには無暴でも異端的でもないはずだ。所詮、僕のいう「アメリカ性」とは、*Wuthering Heights* とアメリカ小説との共通性のことにはかならず、文学史の事実は無視できぬとしても、この種のアプローチをとることは、ある意味で二つの小説の伝統の特性を考えることになる。別の言い方をすれば、*Wuthering Heights* をアメリカ小説に近ずけることによって、僕は捕われない眼でアメリカ小説のアメリカ性を考えることができるのではあるまいか。本来正反対とされている対象物のなかに共通性を見出すことほどに、ある事物の特性を探るに容易な方法はありませんだろうからである。

この点に関連して興味深いのは、最近のある論者が『イギリス小説の伝統』と題する書物のなかで *Wuthering Heights* にかなり紙幅を費している事実である。この論者が Brontë の作品をイギリスの伝統に立つ小説とみなしていることは言うまでもないだろう。たしかに、そこに主張されているごとく、この小説は「劇的小説」であり、悲劇感にあふれている。一個の作品としての価値については、なんの異議をさしはさむ余地はあるまい。がしかし、この「イギリス」小説の類縁を求めた論者が、こともあろうに Melville の *Moby Dick* をあげているのは、どのように理解すべきであるのだろうか。⁽⁴⁾ たしかに、作品の内的な類似性は否定できない。いや、それ故にこそ、アメリカ小説の最高傑作たる *Moby Dick* が *Wuthering Heights* と同類であるということとは、二つの伝統になんらの区別もないということになるのではあるまいか。

-
- (4) 太田藤一郎『イギリス小説の伝統』（1965年南雲堂）215頁。*Wuthering Heights* を *Moby Dick* と並列に考える人はすくなくない。しかし、すべて両者にみられる「悲劇性」ということが論議の中心となっている。このことは、この二冊に *King Lear* をつけ加えて論じていることから想像できる。このことは、しかし、イギリス小説とアメリカ小説との伝統という問題には全然関係をもっていない。

Wuthering Heights が Melville 的であり、かつ Brontë の作品が論者の主張するごとくイギリス小説の伝統に属するということは、アメリカ小説の伝統がイギリス小説のそれに吸収されることを意味する。逆に、*Moby Dick* がアメリカ小説であることを認めながら、*Wuthering Heights* との間に類似性を求めることは、後者のイギリス性を否定することにはかならず、論者としては自己矛盾におちいることになりかねない。いずれにしても、問題は Brontë をイギリス的と考えたところに発生したのであるから、いっそ Chase 流にひらき直って、*Wuthering Heights* をアメリカ小説の一冊として読みすすめるのが望ましいとさえ言えるのだ。もちろん、この作品のアメリカ性を考えることは容易ではない。性急な結論は慎まねばならぬとしても、この種の見方は僕らに大きな収穫をもたらしてくれるであろう。

II

Wuthering Heights が世に出たのは 1847 年のことであったが、大西洋のかなたでは、その三年後に Hawthorne の *The Scarlet Letter* が、さらに一年おくれて Melville の *Moby Dick* が相ついで出版されている。この二人のアメリカ作家の作品が彼らの代表作であるばかりか、アメリカ小説の代表的傑作であることには、大方の意見が一致している。とすれば、いま *Wuthering Heights* のアメリカ性について考えようとしている僕らにとって、このほとんど同時期に書かれたアメリカ小説の存在はきわめて重宝なものと言わねばなるまい。果して、Brontë の作品とこれら二冊の作品との間になんらかの「共通性」を発見し、それを「アメリカ的」と命名することが可能であるのだろうか。

きわめて素朴な読者の立場から出発しよう。一体なにか *Wuthering Heights* と *The Scarlet Letter* と *Moby Dick* に共通しているか、という質問を与えられたと仮定するがいい。僕らは即座に解答を、しかも正解を見つる

ことができるはずだ。三冊ともに、疑う余地なく「復讐の物語」であるのではないか。 *Wuthering Heights* においては Heathcliff が着々と復讐の計画を実行する。 *The Scarlet Letter* においては裏切られた夫 Chillingworth⁽⁵⁾ の探求が七年間にわたってつづけられ、 *Moby Dick* における Ahab 船長は復讐の鬼に化して白鯨を追い求めている。三人三様に復讐を誓う動機を持ち、その目的の達成寸前に空しく死に絶えて行くのだ。

もちろん、いかに素朴な読者といえども、復讐の物語自体が *The Scarlet Letter* や *Moby Dick* をアメリカ小説に仕立てているのではないことは承知している。 *Wuthering Heights* に復讐の物語の存在することは、この作品が「アメリカ性」を獲得することになるのではない。しかし、僕らとしては単に出版の時間的同時性しか持ち合わせていなかった三つの作品が、「復讐」という同一次元において取り扱うことができることに気がつく。この「復讐」という材料がいかに取り扱われているか。これが僕の次の疑問となってくるのだ。

Wuthering Heights が Heathcliff の復讐の物語であることは、今更僕が指摘するまでもない。多くの批評家の議論は、その復讐のもつ意味の詮索にあったとさえ言い切ることでもある。ところが、奇妙なことは、はじめてこの作品に接したとき、先入観念のせいもあるだろうが、あの強烈な個性の持主であるはずの主人公 Heathcliff のことはあまり僕の印象に残っていないのだ。もちろん、異常性格者とも呼びたいこの男が作品全体において占める位置は大きい。この人物のいない *Wuthering Heights* など考えられる道理もないの

(5) *The Scarlet Letter* の主人公は誰れであるか、という議論は Henry James 以来くりかえされている。しかし、僕には、Hester, Dimmesdale, Chillingworth の三者が、「緋の文字」を中心とする正三角形を描いている。(Pearl は生きた緋文字として、三角形の中心にある。) 従って、この三角形の頂点をどれにするかによって、主人公は変って行く。主人公はいないともいえるし、三人が主人公ともいえる。この意味で、Chillingworth の復讐の物語として *The Scarlet Letter* を読むことは可能である。

だ。にもかかわらず、僕の心にはこの人物の生活と意見がさほどに強い影を落してはいないのだ。

というのも、最初から僕はこの作品の技巧面に強く心を奪われていたのだ。Heathcliff の復讐の口口よりも、それを提出する作者の口口に魅せられていたと言ってもよい。なるほど、僕らは物語の冒頭から烈風の吹きすさぶ「嵐ヶ丘」に導入される。そこに三代にわたって展開するドラマは、ある意味で僕らの想像を絶している。常識では理解できない事件の連続にはかならないのだ。しかし、僕らは最後まで、この「復讐の物語」の直接の目撃者となることは許されていないのだ。物語は常に家政婦 Nelly Dean の口を借りて語りつけられている。事件のただ中に置かれたと僕らが錯覚するときでさえ、この語り手の地声が僕らの耳にひびいてくるのだ。さらにまた、僕らはこの物語の聞き手たる Lockwood の存在をも忘れることは許されない。彼は正常な都会育ちの青年であり、「嵐ヶ丘」の異常な雰囲気とは無縁の人間であって、最も平凡な常識人と呼んでもいい。言ってみれば、彼は読者の代表であり、非常識な世界の出来事を直接見聞するのではなく、あくまでも Nelly Dean の話として受け取ることになるのだ。

はじめて *Wuthering Heights* に接したとき、僕はこの Lockwood の存在が無用のように思われてならなかった。しかし、考えてみれば、この人物の存在によって、ようやく「嵐ヶ丘」の異常性が一般世間との流通口をもつことができるのではないか。Nelly Dean という語り手が「嵐ヶ丘」の世界の代弁者であると考えられるゆえに、常識的な一般読者の世界の代表者たる Lockwood との対話という形で *Wuthering Heights* の物語が進行することは、作品全体に奇妙な二重の枠組を与えることになる。この枠組をみとめた上で、それを通して読者は内部に展開する愛と憎しみの葛藤に見とれることができるのだ。

この *Wuthering Heights* における読者のための「のぞき窓」が Melville の *Moby Dick* にも用意されている、と言え、それを僕の単なるコジツケ

と言って笑う人があるかも知れない。たしかに、この白鯨と船長との斗争の物語は凄絶をきわめている。三日三晩の追跡のあと、*Pequod* 号と共に海底の藻くずと消えた Ahab 船長の物語には、悲劇的という言葉を使ってもいいかも知れない。だが、この場合にもまた僕ら読者は最後まで白鯨の直接の目撃者となることは許されていないのだ。

Moby Dick の主人公が Ahab 船長であるか、あるいは白鯨であるのか、僕にはにわかに決めがたい。作品全体の背後に常に存在するあの鯨の白さを思うとき、Ahab 船長自身も壮大な人生というドラマのなかの単なる脇役にすぎないかも知れない。ただ僕にわかっていることは、この *Moby Dick* の見事なドラマには、常にひとりの目撃者がいることだ。もちろん、僕は Ishmael のことを言っている。この語り手たる「私」の存在のゆえに、僕らはあの *Moby Dick* の世界の非現実的な構図のなかに楽々と入りこんで行くことができるのではないだろうか。第一、すべての登場人物が死にたえるこの物語の全貌を知っているたった一人の生存者たる「私」がいないことには、あの竜穴な物語は一頁も書かれることはなかったはずである。

この作品における Ishmael を *Wuthering Heights* における Lockwood、あわよくばロマンスを求めることができるかも知れぬと考えている呑気な若者 Lockwood と比較することは容易である。Ishmael もまたロマンティックであり、人生に対する夢を抱いて *Pequod* 号に乗り組む。彼はきわめて平凡な若者であり、海に出ることによって「遠いものに対する無限の憧れ」を満たすことができると信じている常識人なのだ。彼もまた Lockwood 同様、読者たる僕らの分身であり、作品の異常な事件はこの人物の眼を通して僕らに紹介される。Ahab 船長が僕らの前に姿を現わすのは、*Pequod* 号の出航後かなりの日時が経ってからであり、Ishmael の視点が確立されてからであることを考えても、この人物が作品の構成上にもつ意味は大きいと言わねばなるまい。*Moby Dick* の「のぞき窓」としての Ishmael を通して、僕らは Ahab

船長の苦悩に接し、白鯨の意味に触れることができるのだ。

とすれば、*Wuthering Heights* も *Moby Dick* もともに「復讐の物語」であり、ともに「のぞき窓」を読者のために用意している。この意味で二つの英米小説にかなりの共通性を認めることができるのだが、Hawthorne の *The Scarlet Letter* においては、一体いかなる「のぞき窓」が用意されているというのだろう。言うまでもなく、この作品には前二者における「語り手」や「目撃者」は登場しない。読者はじかに Hester や Chillingworth や Dimmesdale の織りなす三角関係の物語に接することができるように思いこむ。しかし、それはあくまでも読者の錯覚にすぎないのだ。Hawthorne は語り手にかわる巧妙な「のぞき窓」を用意することを忘れてはいないのだ。それはほかならぬ、あの長たらしい序文 “The Custom House” であるのだ。

最近、*The Scarlet Letter* においてこの序文のはたす機能についての意見が聞かれる。⁽⁶⁾ この序文ぬきの *The Scarlet Letter* は完全とはいえないというのが共通した結論のように思われるが、僕としてはその機能を読者のための「のぞき窓」として受け取りたいのだ。Hawthorne は彼の物語が暗く陰気であると考え、十九世紀半ばのアメリカの読者に反感を起させることを恐れた。その結果、このアメリカ作家はまずユーモラスで明るい現代風な税関のスケッチを *The Scarlet Letter* の冒頭に持ちこんだのだ。この一見さりげない序文によって、作者は読者に安心感を与え、あとに続く物語の暗さをいささかなりとも柔らげること考えたのである。⁽⁷⁾ もしこの序文を経過することなく *The Scarlet Letter* に接するならば、読者は（すくなくとも十九世紀の読者

(6) たとえば、Larzer Ziff (*Modern Language Notes*, LXXXIII, May 1958), Charles R. O'Donnell (*Nineteenth Century Fiction*, XIV, March 1960), Sam S. Baskett (*College English*, Vol. 22, No. 5, February 1961), Charles Feidelson (*Symbolism and American Literature*, 1953, p.3) など参照。

(7) この *The Scarlet Letter* における序文の機能については、Richard B. Sewall, *The Vision of Tragedy* (1959), pp.92-93 に負っている。

は) その陰うつさに圧倒されることになったであろう。こう考えると “The Custom House” なる序文は読者の警戒心をとき放ち、読者に安心感を与えるためのものであり、読者に *The Scarlet Letter* への安全な入口を提供している。*Wuthering Heights* や *Moby Dick* の作者の場合と同じく、Hawthorne も彼の作品に読者用の特別な「窓口」を提供していると言えるのではあるまいか。

これまで僕は廻りくどさは覚悟の上で、Brontë の作品における「復讐の物語」が二つのアメリカ小説にも発見されること、さらにその各々の作品に読者のための「のぞき窓」が用意されていることを指摘してきた。だが、一体なぜこれらの作品の著者たちは、このような複雑な構成を物語に与えねばならなかったのか。一般的に言って、読者に直接の目撃者となることを許さない小説の世界といえば、かなり異常な事件や雰囲気の世界であるにちがいない。作品のなかに描かれる世界がアブノーマルであればあるほど、読者は反撥を覚え、そこに真実性を認めることをさしひかえる。この疑い深い読者をいかに納得させ、小説のなかにひきずり込むか。そのための方法として用いられたのが、*Wuthering Heights* や *The Scarlet Letter* や *Moby Dick* における「のぞき窓」であると言えるのではあるまいか。言葉をかえていえば、読者のために安全な「のぞき窓」を用意せねばならぬほどに、これらの作品の世界は異常であり、常識的な読者の接近を許さない世界であると考えられるのだ。

Wuthering Heights が出版されたとき、一般読者は、当時のかかなり空想的な作品に親しんでいたにも拘らず、この作品を「反動的 (revolting)」と評し、「疑う余地なく、救いがたいまでに奇怪な (unquestionably and irredeemably monstrous) 作品」と呼んだと言われている。いや、作者 Emily を熟知していたはずの Charlotte までも *Wuthering Heights* のもつ力強さを認めながら、その未熟さを指摘し、非道德性を非難しているのだ。⁽⁸⁾ さきに

(8) Cf. Elizabeth Drew, *The Novel* (1963), p. 174.

僕らが見出した「のぞき窓」にもかかわらず、この反応である。もしも読者が直接あの Heathcliff の物語に接することになったとすれば、一体いかなる評言が加えられたことであろうか。Brontë の物語が異常であるのにも劣らず、*The Scarlet Letter* や *Moby Dick* もまた非常識的であり、常識的な読者にとっては反撥を感じさせるていの世界を取り扱っている。Hawthorne がみずからの作品を「地獄の火で焼かれた (Hell-fired)」と形容し、Melville が白鯨の物語を「邪惡な書物 (a wicked book)」と呼んでいるのは、そのへんの事情を雄弁に伝えていると言えよう。

これら三つの小説作品にみられる「のぞき窓」が作品のもつ非日常性と密接な関係をもっと考えることが正しいとすれば、*Wuthering Heights* と二つのアメリカ小説との共通性をその「非常識性」に求めることができよう。といって、その共通性を「アメリカ的」とまで呼ぶ段階に僕は至っていない。一体いかなる意味で *Wuthering Heights* は非日常的であり、一体いかなる理由でその非日常性をアメリカ的と呼ぶことができるのであろうか。

III

さきにも触れたように、イギリス小説の最も典型的な作家といえば、Jane Austen をまず思い浮べるのが普通のことであろう。彼女の作品の世界は、どれもきわめて狭少であり、日常生活の域を出ることはない。そこでの最大の関心事は「結婚」というきわめて平凡な問題にほかならないのだ。彼女の小説について単なる娯えらびの作品にすぎぬと悪口を言う人があっても不思議ではない。最高級にドメスティックな世界——これが Austen の世界にほかならない、といっても過言ではあるまい。

この「結婚」という点にこだわるならば、たしかに *Wuthering Heights* においてもこの問題は取り扱われている。すくなくとも、五組の夫婦ないしは恋人同志が登場している。しかし、幸福な結婚を予想される Hareton と (娘

の) Catherine との一線をのぞいては、いずれも正常な結婚とは言いがたい。妻と死別したあとの Hindley は狂人同様の死に方をするし、Isabella に対する Heathcliff の虐待は犬猿の間柄にも見られないほどのものにほかならない。Linton と Catherine の結婚にいたっては法律的にさえ怪しい状態であるのだが、これらすべての不幸の種ともいえる Edgar と Catherine との結婚は僕らの注意をひかずには置かないのだ。言ってみれば、この *Wuthering Heights* 全体はいかにして幸福な結婚をするかという Austen 流の主題に対するパロディである。「結婚」の破壊者としての Heathcliff の創造が Brontë の単純な読者にとって「反抗的」であり、「奇怪」に思われたとしても不思議ではあるまい。「非道徳的」と形容されたのも無理なからぬことであるのだ。

この点について言えば、*The Scarlet Letter* にもまた「結婚」の主題は存在しない。いや、もっと正確に言えば、「結婚」の破壊したところからこの物語は発展している。Chillingworth の「復讐」は Hester の姦通を発見したとき、つまり家庭生活の破壊に端を発しているのだ。ところが、*Moby Dick* にいたっては、この「結婚」の主題などは見る影すらもない。船長 Ahab の行動は、家庭生活に背をむけて *Pequod* 号に乗りこんだときに開始している。それは「女のいない男たち」とヘミングウェイ流に定義してもよい世界である。この物語に登場する Ishmael と Queequeg との間に同性愛的な傾向を読みとった批評家までいる事実からも容易に察することができる不毛の境地に⁽⁹⁾はかならないのだ。

この *The Scarlet Letter* や *Moby Dick* における「結婚」の不在が、いかに非日常的な世界であるかを知るためには、出版当時のアメリカの現状をふりかえて見れば一目瞭然とするであろう。1850年前後のアメリカ小説界は「女性的な五〇年代(feminine fifties)」という表現から察することができる

(9) Leslie Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (1960) における *Moby Dick* 論参照。

通り、流行作家の大半は女性であり、その題材は家庭問題であり家庭生活にはかならない。そこに描き出される主題は神への服従が幸福をもたらすという美德のすすめであったり、立派な言動は幸福な家庭と社会的地位を築くなどという教訓であったりする。Gaskell 夫人がアメリカ小説の現状にふれて、アメリカ小説が「小さな家庭の秘密」を描き、「家庭の争い」を取りあげることに言及し、「彼らが勝利をおさめると、われわれは大喜びをするのです」と語っているのは、当時の読者の気持をそのまま伝えているのであろう。⁽¹⁰⁾とすれば、こうした文学的環境において書かれた *The Scarlet Letter* における姦通の物語や *Moby Dick* における神をおそれぬ Ahab の物語が、十九世紀半ばの読者にとって想像を絶した世界であったことは容易に理解できる。前者は家庭生活の破壊を、後者は家庭生活の放棄を、それぞれ描いていたからにはほかならないのだ。そこには「結婚」などからは最も遠い世界が描出されていると言ってもよい。

ここまで考えてくると、僕が *Wuthering Heights* のみならず、二冊のアメリカ小説を非日常的と呼ぶとき、その意味は「結婚」の主題の不在ということにほかならぬ。*Wuthering Heights* のアメリカ性を考察すると言いながら、これはまたありきたりの、うっかりすれば文学的主题とはかけはなれているかに思われる鍵をもち出して来たものだ、との非難を受けるかも知れない。「結婚」とは、たしかに、平凡な概念であり、新鮮味のない思いつきにすぎない。一体このような俗っぽい立場から、アメリカ小説のアメリカ性に迫ることができるであろうか、と思う人があっても不思議ではないだろう。

がしかし、ここで改めて考えてみるまでもなく、「結婚」は一面において最も個人的であり生理的な現象にほかならぬとしても、同時にまた、それは他面において最も社会的で歴史的な現象であることも認めざるを得ない。さらに言

(10) このへんの説明は James D. Hart, *The Popular Book* (1961), p. 91 の叙述に負っている。

えば、人間生活そのものが、個人的で心理的・生理的であるばかりでなく、その社会面・歴史面を無視することのできないものである。とすれば「結婚」は、その人間生活のもつ「二面性」を見事に表現している人間行為に数えあげることができるであろう。この「個人」的側面と「社会」的側面のいずれを欠いても、完全な意味での「結婚」を期待することはできないのだ。「社会」と「個人」とのバランスが「結婚」の重要な要因と言ってもよい。とすれば、*Wuthering Heights* のアメリカ性を考えるに当って、そこに「結婚」の不完全さを認めることは、作品における社会と個人に対する考え方を調べる上で無意味なこととは言えないであろう。

この立場から言えば、イギリス小説の典型とされる Austen の世界がドメスティックであり、「結婚」が最大関心事として扱われ、幸福な結婚によって作品の幕を閉じるという事実は何を指し示しているか。結局のところ、それは彼女の世界が個人と社会についての安定した認識の上に成立していることを意味しているのではあるまいか。個人的な現象としての「結婚」が、そのまま社会という枠組のなかに受け入れられ、社会の構成要素となることを示していると言ってもよい。ある論者が Austen における「結婚」にふれて「自然さ⁽¹¹⁾ (naturalness) と社会形態 (social forms) の融合」と書いているのは、このへんの事情を物語っているのであろう。では、不幸な結婚、不完全な結婚しか扱われてない *Wuthering Heights* や *The Scarlet Letter* や *Moby Dick* においては、一体個人と社会との関係はどうなっているのだろうか。

すでに触れたように *Wuthering Heights* には何組かの「結婚」が扱われているけれども、結局のところ、最も重要なのは Catherine と Edgar との結婚といえる。物語全体がその事実の上に構成されていると言っても過言ではな

(11) Richard Poirier, "Mark Twain, Jane Austen, and the Imagination of Society," *In Defence of Reading*, eds. Brower and Poirier (1962), p. 289.

いし、Heathcliff の悪質な復讐もそこに端を発しているからだ。Catherine の結婚の意味を吟味することによって、僕らは個人と社会との関連性に接近することができると思われる。

今更強調するまでもなく、Catherine は Heathcliff を愛している。二人は幼な友達であり、「嵐ヶ丘」の自然のなかで自由に思いのままの生活を楽しむことができた。彼女の激しい性格は男まさりであり、Heathcliff のそれと好一對をなしている。彼もまた情熱的で本能と意志のかたまりのごとき男であるからだ。がしかし、彼女は同時に Edgar にも惹きつけられる。「嵐ヶ丘」が Catherine や Heathcliff の野性的な雰囲気象徴するとすれば、「スラッシュクロスの屋敷」は Edgar の世界であり、それは「嵐ヶ丘」にない何物かを備えている。それを僕らは文明的と呼んでもいいし、社会的と呼んでもいい。とにかく、Heathcliff の野生的で閉鎖的な性格とは好対照をなくしていることには疑いない。Heathcliff が Edgar に対して用いる言葉を使って言えば、「義務」と「人間性」と「隣み」と「慈善」が後者の世界を構成している要素とも考えられる。言ってみれば、Edgar は人間社会の正常な営みを代表しているのであり、これに対して Heathcliff は人間社会への反抗の姿勢を具体化した人物であるのだ。

とすれば、*Wuthering Heights* における「三角関係」は Catherine をめぐって二人の正反対の男性の間に構成されることになる。ある論者の適切な表現を借りて言えば、Edgar は「社会的・倫理的・理性的」であるのに対し、一方の Heathcliff は「個人的・放任的・非理性的」にほかならない。⁽¹²⁾ しかも、この *Wuthering Heights* の最も異常な点は、「Cathy が『二人をもとう』と期待していることであり、この期待がきわめて『自然』であると考えて、Heathcliff と Edgar のいずれもがそのような三角関係に同意しないゆえに立

(12) Albert Guerard, preface to *Wuthering Heights*, Washington Square Press edition, p.xviii.

腹していることである⁽¹³⁾」ということになるのだ。*Wuthering Heights* において、Catherine が Edgar と「結婚」しながら Heathcliff にひかれるということは、とりもなおさず彼女の「結婚」の不完全を物語っている。「三角関係」をとることによって、はじめて「完全な結婚」となり得るとは、一体いかなる状況を指し示しているのであろうか。

Austen の世界においては、「結婚」という「個人」的な行為がそのまま「社会」的次元につながっていることは先に触れておいた。「個人」と「社会」とが「結婚」という行為において有機的に結合すると言ってもよい。しかし、*Wuthering Heights* において、Catherine の愛する二人の極端な性格の男性は、象徴的に言って、その「社会」(Edgar) と「個人」(Heathcliff) との次元を代表している。従って、Catherine が Edgar と結婚することは、二面的な「結婚」という行為の「社会」的側面が充足されるにすぎない。その「個人」的な側面における完結を求めて、彼女は Heathcliff を愛しつづけるのだ、と解釈できるのではあるまいか。そして、この「結婚」が社会性と個人性をもつ人間生活の縮図であると考えることができるとすれば、Brontë の作品における「個人」と「社会」とはかなり複雑な関係を示している、とも言えよう。

たかが「結婚」をめぐって大げさな分析と言われるかも知れない。しかし、*Wuthering Heights* における変則的な結婚の生態は、そのまま背後にある「社会」観にまでつながっている。すくなくとも、典型的なイギリス小説にみられるとき「社会的人間」としての「個人」はそこには登場しない。⁽¹⁴⁾「個人」は常に「社会」と対立した存在として描かれる。別の言い方をすれば、「社会」はイギリス小説一般におけるように、確固たる実体をもつのではなく、「個人」によってたえず疑われ否定される対象として描き出されるのだ。この

(13) *Ibid.*, p. xiv.

(14) この点については、拙稿「Trollope の *The Warden*——アメリカ小説の立場から——」(大阪外国語大学『学報』15号) 参照。

「個人」と「社会」のひずみを *Wuthering Heights* における「結婚」は明確にとらえているのであり、それを僕らはアメリカ小説のなかにも見出すことができるのだ。

たとえば、*The Scarlet Letter* における「結婚」を考えてみることにしよう。⁽¹⁵⁾物語がはじまったとき、もはや Hester と Chillingworth との「結婚」は破壊している。Hester は Dimmesdale に惹かれて Boston に留まり、Chillingworth は姦夫をはげしく追求する。ここにもまた、僕らは *Wuthering Heights* の場合と同じく「三角関係」を発見するのだが、*The Scarlet Letter* においてはこの関係はなにを意味しているのであろうか。そこにもまた、僕らは「社会」と「個人」の奇妙な対立を見取ることができるのであろうか。

この場合の「三角関係」は、*Wuthering Heights* の場合と比べて若干異っている。Hester は牧師にひかれはするけれども、Chillingworth には反撥を感じているのではないか、と言う人があるかも知れぬ。Hester と Dimmesdale との恋愛関係になんらかの意味を見出すことができるとしても、医師との関係には意味の見出しようがないように思われるかも知れない。にもかかわらず、僕はこの悪魔的な人物と Hester との間に陰微な結びつきがあると考えなのだ。

たしかに、Hester はもはや Chillingworth に対しては一片の愛情も抱いていない。彼らの「結婚」は大西洋のかなたの出来事であり、過去の世界に

(15) *Moby Dick* には「結婚」が直接取り扱われていないので紙数の関係もあり、ここでは省略するが、「個人」(Ahab)と「社会」(*Pequod* 号の世界)との対立がこの作品にも見られることは言うまでもない。しかし、この作品において「結婚」が扱われていないことは、*Moby Dick* がすくなくとも非イギリス的であることも物語っている。しかも、先に触れたように、ここに同性愛的傾向を見とる批評家の発言を受け入れるならば、それは明らかに自然な「結婚」とは対照的とはいえるであろう。

属するのだ。がしかし、Hester は医者から完全に離れることができるのではない。彼女は「言葉でも、素振りでも、顔付でもわしを知っているふりはしない」(訳文は鈴木重吉訳)ように誓わさせられる。彼女は前夫の秘密を守ることになるけれども、それは彼女にとって「魂を滅すような縁に誘い」こまれることであり、Chillingworthは「町のまわりの森によく出る魔王(Blackman)」に思われるのだ。Hawthorne は「魔王」などという風変りな概念をもちこんではいるが、これが実は Hester と Chillingworth をむすびつける強力な絆の働きをしているのだ。

Hester は「社会に頼るものは自分の他になく」まったく「独りぼっち」で生活をつづけるが、やがて世間的な考えを投げすてて「この世の法律など彼女の心の法律ではない」と感じるまでに至る。それは精神の無政府状態であり、彼女の姿勢は反社会的・個人的と呼んでも差支えないであろう。がしかし、この彼女が本当の意味で「人間的な愛情と同情」を抱き得るのは「森」の世界においてであり、そこで彼女は(一時的であれ)あのいまわしい緋文字を胸から取りはずすことができるのだ。にもかかわらず、この「森」はほかならぬ「魔王」の支配する世界であり、その意味では「魔王か魔王の密使」と呼ばれる Chillingworth と共通の世界にほかならない。とすれば、Hester は自由で個人的や生活に憧れるという行為によって、きわめて皮肉なことに、悪魔的な Chillingworth に無意識のうちに惹きつけられる、という結果を招いているのだ。⁽¹⁶⁾ 言ってしまうと、Hester と Chillingworth との関係は、*Wuthering Heights* における Catherine と Heathcliff の関係と同じく、女主人公の「結婚」の「個人」的側面を象徴しているのだ。

他方、Hester の惹かれる Dimmesdale とはいかなる人物であったのか。このことは彼を「人間の掟にも従わず、より高い真理にも輝やかない未開異端

(16) この Hester と Chillingworth との結びつきについては、William B. Stein, *Hawthorne's Faust: A Study of the Devil Archetype* (1953), p. 116 参照。

の自然の森」に置くことによって明らかになってくる。この「森」で Hester と国外脱出の計画を出した直後、彼は「思想や感情の領域で大改革」を経験する。牧師らしからぬ奇怪な衝動にかりたてられ、「聖なる衝動」は影をひそめてしまうのだ。というのも、牧師は所詮「一般に認められているおきての範囲」から出ることは経験したことがなく、「社会の掟や道義」に拘束されている人間にすぎない。彼は Hester との過ちを「情熱から犯した罪」と考え、「主義」や「目的」があって犯した罪とは考えていない。牧師という最もインサイダー的な職業をもつこの男は、「身のまわりに信仰という鉄の棒」を置き、「信仰の圧力」を感じることで社会秩序を守っている人間であるのだ。牧師が反社会的な「森」の世界のあとで大混乱を覚えたとしても不思議ではない。こう考えることが正しいとすれば、Dimmesdale は Chillingworth とは対照的な位置を占める人物であり、いわば「社会」の代表者として受けとめることができる。この牧師に Hester が運命的な愛を感じているとすれば、そのままこの関係を Catherine と Edgar とのそれに移しかえて考えることができるのではあるまいか。

ここまで考えてくると、*The Scarlet Letter* における「結婚」のもつ異常性に気づかざるを得ない。Hester と二人の男性が織りなす「三角関係」は単にリアリスティックな次元においてのみ取り扱われているのではない。彼女が嫌悪しながら結果的にひかれる Chillingworth の存在は、彼女の自由を求め個人的な世界を憧れる行為が「悪魔的」で反社会的であることを示している。同時に、Dimmesdale は一見 Hester の国外脱出の同伴者であるかに思われるけれども、「悪魔的」な森の世界とは無縁の人間にほかならない。とすれば、*The Scarlet Letter* における不完全な「結婚」の生態は、そのまま作品内部における「社会」と「個人」との対立を明確に指摘しているのではあるまいか。あくまでも *Wuthering Heights* とアメリカ小説との間に共通性を見出し、それをアメリカ的と呼びたい僕としては、二つの作品にみられる「三角関係」と「結婚」を通して「社会」と「個人」の対立のおとす影を読みとりたい

のだ。これをアメリカ的と呼ぶことができるという原因は単純である。典型的なイギリス小説、たとえば Austen の場合、幸福な結婚が描かれ、それが背後にある「個人」と「社会」の幸福な結びつきを示していると考えられる。

Wuthering Heights においては、その幸福な結合はみられないし、かつ、「社会」と「個人」の対立は *The Scarlet Letter* すに見うけられるゆえに、Brontë の非イギリス的な性格をアメリカ的と称することができると思うのだ。

もちろん、*Wuthering Heights* も *The Scarlet Letter* も共にその結末はあかるい光にみちている。前者においては Hareton と Catherine の幸福な結婚が暗示されているし、後者においても Pearl が「結婚して幸福な生活」を送っているかも知れぬと結ばれている。そこには僕のいう「社会」と「個人」との対立などあり得ず、むしろ両者は見事に結合した展開を示すのではないかと考える人があるかも知れない。しかし、結末においてそのような「幸福な結婚」が描き出されていること全体、いかにも取ってつけたかの印象を与えずにはおかない。いわば、作品全体の要求しない操作によって「社会」と「個人」とが結合させられているかにさえ思われる。とすれば、この一見明るい結末はどうともしがたい二つの要素の対立を、そのあらわな「結合」への試みのゆえにかえって疑う余地のないまでに露呈していると言えるのではなからうか。

ここまできて僕は僕自身に課したテーマがいかに困難であったかをようやく悟ることができた。僕には結論らしきものさえ書き加えることはできない。僕としては途法もない廻り道をしながら、*Wuthering Heights* のなかに「社会」と「個人」と対立を見つけ出し、それに「アメリカ的」の形容詞を冠することを考えてきた。しかし、それは、たとえば “Novel” と “Romance” という概念をもちこみ、Brontë の作品がイギリス流の “Novel” でないことを言えば足りることであったかも知れない。いずれにせよ、僕はこの試みにおい

て、アメリカ小説の伝統という大問題の、ほんの入口をさまよったにすぎないのだ。